

日本研究にも刺激を与える アジア・外国研究を

アジアへの旅をはじめて丁度四〇年たった。その間、各国で自国の政治経済についての優秀な研究者が育ってきたことをはっきりと知るようになった。また、私が旅をはじめた頃には想像すらできなかった情報技術の革新によって、外国での出来事がほぼ瞬時に伝えられるようになっていた。現代、「日本で」外国を研究することにはどういう意義ないし意味があるのだろうか。この問題は、研究生活から引退すべき年齢に達している筆者にとっても、改めて自問すべき難題なのである。そこで本号にエッセイを書く機会を与えられたことを利用させてもらって、小生の経験に基づいて少し問題提起めいたことを記しておこう。

一九七〇年代末、タイのアントーン県の稲作農村で数週間農村調査を実施した。労働雇用や水利の仕組みの特徴を私なりに捉え、その調査結果を、Developing Economiesに掲載した。田植えや刈取りでの季節的雇用が、市場経済の原理で行われていることなど、中部タイ農民の経済活動が日本とは大きく異なっていることを、知った。そういつたことに少し言及していたためか、幾人かのタイ人の研究者から日本の稲作経済の仕組みについて質問されたことを記憶している。

その後も旅を続けながら、「東アジアの奇跡」ともいわれるようになる経済成長の実態や、同時に顕在化しはじめていた農工間所得格差の拡大について、私なりに研究を行った。そしてまた、アジア諸国の多くの研究者から、これらの

問題に関連する日本の経験やその分析について聞かれた。そこで、こういつた質問を念頭において、二〇年ちよつと前当時所属していた東大東洋文化研究所の紀要に英文で「日本近代経済成長研究の含意」という副題をつけた「経済発展への制度学派的アプローチ」を書いたこともある。

そしてこの数年間、政策研究大学院大学で、東アジア経済論と農業経済学という講義を担当している。いずれにおいても、アジア諸国の経済が抱える問題を意識しながら、近現代日本の同様の経験や政府のそれらへの政策的対応について講義している。その際、赤松要の雁行形態論や大川一司の過剰就業論など、日本経済の分析のために先達たちが苦勞して作りあげてきた理論や手法を紹介する。と同時に学生たちには、自国の特徴をよく知ったうえで、それらを使うか否かを決め、かつ日本の政策をそのままコピーするようなことはすべきではないとも伝えているところである。

いずれにせよ、若い研究者には、学問の蓄積まで含めて我が国を自分なりによく知る営為を続けながら、対象地域を研究してほしいと考えている。外国を知ること、我が国のあり方を改めて問い直す大切な契機となるはずである。日本研究をも刺激しうるような研究であつてこそ、各国に育ってきた一流の研究者にも、その価値を認めてもらえるのではなからうか。そんな研究成果を、これからの若い研究者に強く期待しているところである。

はら ようのすけ

東京大学東洋文化研究所教授、政策研究大学院大学教授を経て、現在政策研究大学院大学特別教授。アジア経済論、農業経済学。